

一 次の文章は、筆者が北海道の知床半島沖に鮭漁を見学に行ったときの様子や思いなどを記したものである。よく読んで後の問に答えよ。

「何年も何年もこの漁に馴れてきた老漁師は、風の具合と紅葉の色で、その年の漁の模様を云いあてますよ。山の色がどうだから、さかなはもうそこまで来ているとか、きょうの北風の具合じゃさかなはぴんぴん躍ってるだろうとかね。それでその通りなんですよ。」——なんという優雅なすなり人の思いだろう。紅く黄いろいもみじと肌を刺す北風と銀鱗である。魚は漁るけれど、漁る魚には優しい愛情が向けられているのである。それなくて、こんな美しい思いがもてるかとおもう。魚は北風に冷えて勇んで、生れ故郷の河水の味を慕い寄ってくる。山はもみじで、^aセイ澄である。魚は河をのぼって産卵したのが生命をかけての帰著である。人はその魚を河にのぼらせないように、海の網で獲るのである。獲る業は荒くとも獲る心は優しい。ただ殺戮あるのみというのではない。

—— 中略 ——

船は所定の位置に停止し、網が繰りあげられはじめる。男たちははじめからなのか、あとで穿いたのか、胸当のついているゴムの長ズボンをつけている。黒いゴムだから全身黒くて、からすだ。頸のマフラーが赤い。網は重い。クレハロンやサランの新繊維でつくられている網である。「流行の繊維を使っていますが、この定置網のしたては、銀座のニューモードよりずっと緻密な計算と、熟練した技巧がいります」と云う。

かけ声の拍子が短く高くなって、網は寄せられて来、早くも馴れた眼がまだまだ水深くいる魚の数を、「百か！」と読む。「はいってないね」と云う。えいやえいや。「しけあとでまだちょっと早い時間だ。」えいやえいや。私にもやっと見えた。丸くふとった青黒い背中、魚は右往左往の速さで行きかう。えいやえいや。ばしやばしやと重なりあつた魚としぶき。よしよしと大きく手繰られて魚は水をあがつた。嬉しさと哀しさ。海の幸はここに盛られて、温度の低い陽はきらきらとしている。北の海である。ほっとした表情の男たちは、胸もズボンもずぶ濡れである。濡れて、これも^①きらきらと光る男たちである。髪は吹きさらされてそそげ、寒風に鼻のさきもおでこも赤く、ゴム手袋を脱いだ指も茹で、えびのように赤い。そして白い歯で他意なくほほえみ、すぐに跡始末である。たばこもつけない精^bレイさで、しごとは終りまでかたづけてしまふのが海の男の行儀だろうか。

そう云えばこの人たちは、網をあげはじめてからむだ口を一通言も利かなかった。ほとんど無言で、眼が話してわかりあつてようだった。声もことばもなく話の通じるのは、たがいに心をわかちあつた間。ガラでなくてはできぬ。これも^②海の男の行儀だとおもう。波と風と魚しかいない海の上に、濡れてることなど気にもしていない男が、行儀を守って働いている。特別気負つてもいず、格別に主張もせず、平らかなで働く老若の男の人！

陸あげして数えると百十五尾あつたという。眼に狂いはないと驚く。俗に一通起し千尾というそうで、百尾は不漁である。その同じ日の午後は、隣の網に八千尾という記録だから、漁には定めがたい運がある。百尾に八千尾は信じがたい差だけれど、漁業組合の作業ぶり、トラックの往^dライを見れば明確である。^③私はひとことながら心が騒いで納まりがたい。「海っていうのはそういうもんです。騒いだつてむだです。獲れる日があれば獲れない日もあつて当然でしょ。だから亡びた家もむかしから何軒もあるんです。」^④動じないのである。「ほら、これがめすですよ。顔が優しくて、からだもすんなり丸いでしょ。これがおす。角張つて、利かん気な顔してますし、魚体もいかついし、この口を見てください。丈夫そうにとんがってましょ。何の世界にも男と女ははつきりしてますねえ。」

鮭の習性は四年で産卵に戻って来て、産めばそれで生命は終るのだが、稀には四年以上たつてから帰るのもある。一見して大きさがすばぬけている。これをすけという。頭立って大きくりつばな鮭をすけというのである。人名にも助太郎などというのがあるのは、頭立つものになれとか、一族の長の位置に生れたものへつける祝いの意であると聞く。鮭は口のなかが赤くなくて黒いと云われる。いま揚げたもののなかにもすけがいて、背中がぼつてり厚かった。

海はひろい。魚のあがつて来る河はきまつている。その河口へ網はいくつも張られているが、それでも逃れて河を遡つて来る。又、逃して遡らせなくてはならぬ。一年産卵がなければ四年目にはそこへ帰つて来る魚がないのである。産卵させなくてはならないし、産卵を保護する必要がある。いまは人工孵化が進歩している。だが遡上する鮭の夫妻はその努力と産卵後の結末が、あまりにいじらしくて正視できないほどだという。河口で妻と夫は相伴う。山川の石多き急流をのぼるうち真水を呑んで魚は、皮膚に変色をきたす。斑が出てきたなくなるのだ。そうなった魚をぶな毛という。卵を抱えた妻を庇つて、おすは口のさきで石をはねのけ、砂を掘つて、皮が剥げ

てしまう。産卵にいい場所となれば、もはや余程さかのぼって水は浅く、夫妻とも背鰭は水面を出てしまう。まったく動けるだけの水しかない浅さだ。鱗も剥げ落ち、からだの色も変わり、すっかり惨めになった夫妻は最後の努力を尽そうとする。そこへ辿りつけるまでに、すでに仲間の数はぐっとへってしまっているのだ。おすは夢中で適当な場所を捜す。砂粒が大きくても小さすぎても卵を覆うのに都合が悪いのだ。そして丁寧に掘る。妻は産む。夫は害敵に備えて血眼だ。そして授精し、大切に砂をかけ終って、生涯のしごとは果される。夫妻ともに精根尽きて、ひどいものになればからだじゅう傷だらけで、しっばも鰭も大。ガイは形をなしていない。あとに残されているのは、自然の休息の時が来ることばかりである。もうどこへ行く処もないし、何をするでもないのだ。すべて終って、惜しくない生命の果てるのを待つのだ。美しかった銀鱗もいまはない。黒ずんだり白茶けたり、剥けて肉のただれたからだに、山川の秋深き水はあまりにも冷たかろう。魚は喘いで、深沈とした夜の風を聞き、昼の雨にうたれる。この精根尽きて死を待つ鮭を、ほっちやれと呼ぶ。⑥その語感のきびしさに私はたじろぐのである。

「あれはたしか正月休みだったかね。深い雪だった。一人でスキー持って出かけて、あの沢へ滑って来て休んだんだ。そうするといふとしたなかで、いきなりがさつというんだ。何もいないんだねえ。雪の落ちたようすでもなし、枝の折れたんでもないんだ。それからふと気がついて、もしやと思って谷へ降りてみると、いたね。大きなほっちやれがさ、からだじゅう腐って、はじめとも哀れとも、——おすなんだ。普通はそんなに遅くまで生きちゃいないんだけど、よっぽど強いやつだったんだね。なんだかしみじみしちゃってりっぱなやつだなあという気もするし、かわいそうでたまらないし、何日、人気も何もない処でそんなになって生きていたんだが、おれが来たんで跳ねたんだ。⑥縁というようなものを感じたよ。それで、どうせもうだめなんだから、手に取ってやったよ。おれの手の上で、それでおしまいになったんだ。静かなもんだったよ。びくりともしないで寝ちゃったんだ。」

雪の谷深く、形もないまでに崩れて、ほっちやれはすなどる人の手の上に終る。胸の濡れわたるおもいがある。

幸田文『男』による

問一 傍線部a～eのカタカナを漢字に改めたものとして適当なものを次の①～④の中からそれぞれ一つ選んで記号で答えよ。

- | | | | | | | | | | | | |
|------|----|----|----|------|----|----|----|------|----|----|----|
| a ①正 | ②誠 | ③生 | ④清 | b ①霊 | ②冷 | ③令 | ④励 | c ①柄 | ②殻 | ③辛 | ④絡 |
| d ①来 | ②雷 | ③頼 | ④礼 | e ①慨 | ②概 | ③既 | ④凱 | | | | |

問二 傍線部①の「きらきらと光る男たち」に込められた筆者の思いとして適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

- ①濡れて光るだけでなく、山の紅葉の色から外洋の鮭のいる位置まで判断できる男たちに驚嘆している。
- ②濡れて光るだけでなく、銀座のニューモードよりかつこい男たちの服装にあこがれを抱いている。
- ③濡れて光るだけでなく、寒さの厳しい海で懸命に黙々と精勤する男の姿にうつくしさを感じている。
- ④濡れて光るだけでなく、北海の荒海で頸に赤いマフラーをしている男たちの粹な姿に感嘆している。

問三 傍線部②の「海の男の行儀」の説明として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

- ①北の漁場の男たちのたばこをこらえている禁欲的な姿。
- ②北の漁場の男たちの共有する暗黙の了解や守るべき掟。
- ③北の漁場の男たちの寒いとも言わないやせ我慢の姿。
- ④北の漁場の男たちの豊漁不漁に惑わされない固い信念。

問四 傍線部③の「私はひとことながら心が騒いで納まりがたい」の説明として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

- ①自分の生活とは関係ないが、一網で八千尾とれたのはでたらめだと憤慨している。
- ②自分とは関係ない話だが、深い海にある鮭の数を言い当てる眼力に感嘆している。
- ③自分の生活とは関係ないが、運が悪いと不漁になるという現実には納得している。
- ④筆者の生活とは無関係だが、この不漁で漁師たちは生活ができるか心配している。

問五 傍線部④の「動じない」の理由として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号⑨

- ① 漁師たちは気負いも主張もなくただ漁のことだけに無心になっているだけだから。
- ② 不漁続きで生計が立たなくても漁師仲間で助け合うのが北の海のしきたりだから。
- ③ 漁は自然とともにあり、漁師の生活も自然に委ねるしかないと分かっているから。
- ④ 鮭の漁場ではたばこも吸えないほど網を揚げるのに忙しく考える余裕がないから。

問六 傍線部⑤「その語感のきびしさ」の説明として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 10

- ① 最後まで雌を守って死ぬ勇敢な雄を象徴するような力強い表現だということ。
- ② なすべき事をし尽くして自然の休息を与えるような優しい表現だということ。
- ③ 帰着した川で、惨めで衰えな姿になった鮭を癒やすような表現だということ。
- ④ いかにもうち捨てるしかない魚体そのものという冷酷な表現だということ。

問七 傍線部⑥「縁というようなものを感じたよ」の内容の説明として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 11

- ① 鮭が鮭漁師である自分に看取られるのを待っていたかのような運命的なつながりを感じた。
- ② 鮭の稚魚が外洋に出て四年たつて帰着すべきたった一つの川を知っている不思議を感じた。
- ③ 鮭の稚魚が外洋で天敵に逢いながら生き残り、帰着して夫婦となる運命的な出会いを感じた。
- ④ ほつちやれを目の当たりにした鮭漁師は他の生物を殺して食う人間の原罪をしみじみと感じた。

問八 この文章の表現上の特色として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 12

- ① 漁業の業界用語を頻繁に用いて、一般の人が鮭漁に興味を抱くようにするのに効果的である。
- ② 漢語を多く用いて文章の格調を高くすることにより、北の海の厳しさを表すのに効果的である。
- ③ 短い会話を頻繁に用いることよって漁師の気の荒さや漁の厳しさ表すのに効果的である。
- ④ 全体的に一つ一つの文が短く、漁師たちの男らしさや漁場の臨場感を出すのに効果的である。

二 次の文章を読んで後の問に答えよ。

男にとって最も身近な、切っても切れない問柄の女といえば、母親と女房である。

母親も女房も「女」とはいえない別種の生きものだ、という主張もあり、それはそれでなかなか説得力のある意見であるが、ここでは一応どちらも女ということにしておいてもらおう。

この二人の女が永遠に不倶戴天の關係にあることは人類の歴史が証明している。一人の男を間に挟んで、片やわが息子として、片やわが亭主として、それぞれが決して譲る気のない「所有権」を主張するとすれば、両者の間に平和はあり得ない。

そのどちらかが非常に賢い^①メイである場合には一種の休戦状態（見かけ上の平和）が保たれることもある。しかし、現実問題としては、稀有に近い。

見かけ上の平和を長く保持する唯一の、そして最良の方法は、この絶対に相容れない二人の女たちを隔離しておくことである。つまり別居だ。同じ屋根の下に両者が顔をつき合わせていたら三日に一回は戦争になる。

「そうはいってもなあ……」と、頭を抱えるのが長男である。日本の^②カン例として「親の面倒は長男がみる」ことになっている。その^③是々非々についても論議を始めたばかりがないから、いまはやめておこう。

一般的に、長男は逃げられない。それに何故か、長男に生まれついた男は逃げようという気持ちを始めから持っていない。これは不思議というしかないが、私の知っている限り、まわり中の長男がみんなそうだ。

我が亡師・池波正太郎は幸か不幸か長男だった。当然、母親の面倒を見なければならぬ。私が通った往原の池波邸には、亡師夫妻と池波正太郎のおふくろさまが一つ屋根の下に暮らしていた。他には猫が八匹か、十四、いや、もっといたかもしれない。そういう状況で、我が師が編み出したのは妻と母という二人の女に対して、共通の敵になることだった。少なくとも表面上、そのように装うことだった、と私は解している。

どのように装うか。一例を挙げれば、母親とも妻とも一緒に食事をしない。自分一人で三度の飯を食うのである。その食事は池波夫人が調える。池波正太郎が飯を済ませたあとで、不倶戴天の二人の女は、それぞれに、共通の敵への憤りを小さな絆としながら、おふくろさまが作ったものを食べる。

これが本当にそうだったのかどうか、私は知らない。池波正太郎が私に「おれは、こうやっているんだよ」と話したのをそのまま書いていただけである。^④ 凄いい話だな……と、いまだにあの日の師匠のことを鮮明に覚

えているのだ。

その話を聞いたとき、私自身はさいわいにして「嫁と姑^{しゅうとめ}の間」に挟まれて暮らしてはいなかった。弟がおふくろと一緒に生活していたのである。幼い娘を抱えたまま離婚した弟は、おふくろに助けを求めるしかなかった。亭主(私の親父)があつさり心筋梗塞で死んでしまったおふくろにしてみれば、可愛い息子と孫娘が自分のところへ帰ってくるのは、まさに「待ってました」というところだ。三人の^⑥ミツ月状態は結構長く続いた。おかげで長男であるにもかかわらず私は、ずっと母と女房を安全に隔離しておくことができた。

その後、いろいろと事情があつて、結局のところ母親は私が引き取って一つ屋根の下に女房と母親が同居することになった。嫁と姑の同居は十年近く続いたろうか。

私の場合は、亡師のように、共通の敵として二人の女に対峙するほどの^②器量はないから、一切を古女房に預けた。おふくろが癌で、いつまで生きられるかわからない身だったということもある。それでも十年一緒に暮らすことになったのは、老人の癌は癌自体も老化していて進行が遅かったからである。

私は仕事柄、取材の旅が多い。年に半分は旅の空で、それは国内ばかりではなく、ヨーロッパだったりアメリカ合衆国だったりする。おふくろのことはカミさんに一任するしかなかった。

いくら年齢をとるうが、癌であろうが、姑の嫁いびりというものは衰えを知らない。身体が不自由になればなるほど、口から噴き出す毒はその成分を増す。

亭主に「たのむ」といわれて、女房はひたすら耐えに耐え、よくおふくろの面倒を見てくれた。むろん、^③よつちゅう爆発する。あたりまえである。そういうとき、私に出来ることは女房がもういいというまでグチを聞いて「済まん」と頭を下げるだけだった。思う存分いいただけのグチをいえばそれを亭主が黙って聞いていれば女房はそれでしばらく気がおさまる。

国内海外の取材が続く中で、たまたま一週間ポカッと空いて、私が家にいたある日、母は女房が晩飯を食べさせている最中に^④ホッ作を起こし、私が救急車を呼んで病院へ運び込んだ三十分後に息を引き取った。その日、偶然にも家にいたことが私の唯一の女房孝行だったろう。しかし、ことおふくろの件に関しては私は死ぬまでカミさんに頭が上がりません。

きようは何を書こうかと思つたのかといえ、女房と母親の間で、男は如何^{いか}に処すべきかということである。結局のところ、私にはまだ答えるすべがない。

絶えず爆発しながらも十年間の長きにわたって女房が辛^⑤ポウしてくれた理由の一つは、これは私の自惚^{うぬぼ}れではないかもしれないが、「おふくろか、女房か、二者択一を迫られたら迷うことなくお前をとる」と、女房にいつてあつたことではあるまいか。「この人には私が一番大事な存在なのだ」と女房が信じるか否か。^④そこに男の人生がかかつている。

佐藤隆介 『池波正太郎直伝 男の心得』による

*池波正太郎 大正十二年〜平成二年。戦後を代表する時代小説・歴史小説作家『鬼平犯科帳』『剣客商売』等多くの作品が映画化・テレビ映画化され人気を博した。

問一 傍線部^①〜^⑤のカタカナを漢字に改めたものとして適当なものをそれぞれ次の^①〜^④の中から一つ選んで記号で答えよ。

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|----|------|----|-----|-----|-----|-----|
| 記号で答えよ。 | ①命 | ②盟 | ③明 | ④鳴 | ①飲 | ②慣 | ③冠 | ④感 | 解答番号 | ①3 | ②14 | ③15 | ④16 | ⑤17 |
| | ①発 | ②掘 | ③堀 | ④保 | ①忙 | ②棒 | ③亡 | ④抱 | ①満 | ②密 | ③蜜 | ④三 | | |

問二 傍線部^⑦の文脈上の意味として適当なものをそれぞれ次の^①〜^④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号^⑦18①19

- ⑦
- ①自己中心的な考えで、多様な他者の存在を許容しない主従関係。
 - ②殺すか殺されるかというほど憎み合つて、この世に共存できない関係。
 - ③絶対的な強者の言うことに不本意ながら従う上意下達の関係。
 - ④仲が良いと思つていたら一夜にして崩れる人情味の薄い関係。
- ①
- ①グローバルな社会で通用するかどうか。
 - ②良いことは良く、悪いことは悪い。
 - ③封建的な家族制度で弊害が多すぎる。
 - ④いいか悪いか、正しいか間違っているか。

問三 傍線部①の「凄い話」の内容として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 20

- ① 池波正太郎夫人の調えた食事は食べ、母親の作った料理は絶対食べないことを続けることによって夫人からの絶対的な信頼を得る作戦。
② 母親とも妻とも一緒には食事をしないで三度の飯も孤食に耐え続けることで、なんとか母からも妻からも逃げない生活を続けていること。
③ 妻と母から所有権を主張されて諍いの種になるより、池波正太郎が妻と母の共通の敵になって妻と母が同盟を結ぶように仕向ける作戦。
④ 金銭的に裕福でありながら、妻とも母とも食事ができず、沢山の愛猫だけが癒やしであるという人気作家のあまりにもさびしい実生活。

問四 傍線部②の内容として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 21

- ① 母と妻の双方から所有権を主張されて奪い合いをされるほどのうつくしい男の容色。
② 妻と母の双方にとって取って自らが敵になるという犠牲的精神を発揮する度量の大きさ。
③ 母親と妻の両方を傷つけないためにはどうすれば良いかを理解して実行する才能。
④ 母親にも妻にも誠意を尽くしてどちらからも信頼を勝ちとるという人間的な魅力。

問五 傍線部③の内容として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 22

- ① 妻が母に対する不満から自分に八つ当たりして鬱憤を晴らす。
② 母が嫁の悪口を言うので自分がやり場のない怒りに苦しむ。
③ 母と妻が互いに自分の正当性を主張して大声で罵り合う。
④ 母と妻の双方から自分がどんなに耐え忍んでいるかを聞く。

問六 傍線部④の説明として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 23

- ① 妻が夫に信頼されているかいないかで夫は真に仕事に打ち込めるか打ち込めないかが決まる。
② 嫁と姑が仲良くして家庭が平和であるかないかで世間での男の評価が上がったり下がったりする。
③ 嫁と姑の共通の敵となるかならないかで男としての値打ちが男社会で上がったたり下がったりする。
④ 妻が夫の愛情を信じるか信じないかで夫は家庭や仕事に生きがいを持てるかどうかが決まる。

問七 次の□に適当な漢字をそれぞれ補って四字熟語を完成させよ。答えは後の①～⑨の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 A 24 B 25 C 26 D 27 E 28 F 29 G 30

- A 用意周□ B 明鏡止□ C □死回生 D 千載一□ E □章狼狽 F □事来歴 G 自家撞□
① 到 ② 等 ③ 着 ④ 周 ⑤ 起 ⑥ 遇 ⑦ 故 ⑧ 帰 ⑨ 水

問八 次の各文のカタカナを漢字に改めたものとして適当なものをそれぞれ①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 A 31 B 32 C 33 D 34 E 35 F 36

- A 三角関係をセイサンして出直します。
B 警察は余罪を徹底してツイキユウする。
C 来月一日に新法律がシコウされる。
D 外国の内政にカンショウしてはならない。
E コウガクのために教えてください。
F 反抗期の子供に両親ともヘイコウしています。
- ① 成算 ② 生産 ③ 清算 ④ 青酸
① 追究 ② 追求 ③ 追及 ④ 追給
① 指向 ② 志向 ③ 嗜好 ④ 施行
① 鑑賞 ② 干涉 ③ 緩衝 ④ 勸奨
① 後学 ② 工学 ③ 光学 ④ 向学
① 平行 ② 閉口 ③ 平衡 ④ 並行

問九 次のA～Gの意味を表す慣用句として適当なものを後の①～⑨の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 A 37 B 38 C 39 D 40 E 41 F 42 G 43

- A 自慢する B 技量が上達する C 物事を始める D 何もせず傍観する。
E おびえて消極的になる F 侮ってわがままをする。 G 他人のすきにつけ込み失敗させる。
① 口を糊する ② 鼻が利く ③ 足をすくう ④ 尻に敷く ⑤ 鼻にかける
⑥ 手が上がる ⑦ 手をこまねく ⑧ 口を切る ⑨ 二の足を踏む

六

次の文章の(A)～(G)に入る作品名を後の①～⑨の中から選んで記号で答えよ。

解答番号 A 44 B 45 C 46 D 47 E 48 F 49 G 50

一九〇五年、漱石は俳句の雑誌「ホトトギス」に発表した『(A)』が好評をとり、以後続編を次々と発表していった。さらに愛媛県松山を舞台にした『(B)』や、『(C)』『二百十日』の熊本を舞台にした作品や『野分』を書き、旺盛な創作力を示した。この時期の作品には、人生を余裕をもって眺めようとする傾向「低回趣味」が強く、しゃれたユーモアや美的世界に遊ぼうとする姿勢は余裕派と呼ばれ、当時主流の自然主義に対抗することになった。

東京大学を辞め、朝日新聞社に入社し、専属作家としての第一作『(D)』以後、『坑夫』『夢十夜』、熊本出身の青年を主人公にした『(E)』を経て、『それから』以後の漱石は、初期の作風からしだいに実存的関心を深め、エゴイズムの問題を中心主題とするようになる。続いて発表した『(F)』は、『(E)』『それから』とともに前期三部作と呼ばれる。

療養に行った伊豆修善寺で生死の間をさまよう、いわゆる「修善寺の大患」後、漱石の言う則天去私の心境を経て、『彼岸過迄』『行人』『(G)』『道草』などの我執を追究する作品を描いたが、一九一六年十二月『明暗』の執筆途中で病没した。

- | | | | | |
|---------|-----------|------|--------|--------|
| ① 坊っちゃん | ② 吾輩は猫である | ③ 門 | ④ 戯作三昧 | ⑤ にこりえ |
| ⑥ 三四郎 | ⑦ 虞美人草 | ⑧ 草枕 | ⑨ こころ | |